2002-28
『大航海』 No, 44 p175-187 (株)新書館 2002.10.5発行

一神教と西欧文明をどう見るか

橋爪大三郎

一神教は地球上に一つしかない

九・一一テロ以降、アメリカによる対テロ反撃のアフガン戦争や、パレスチナ紛争の激化など、まるでキリスト教、イスラム教、ユダヤ教が三つ巴で争うかのような様相になっています。そんななか、ハンチントンの『文明の衝突』のような見方、すなわち、キリスト教とイスラム教は文明が違うので結局理解しあえないだろうという見方も、一部でそれなりに説得力をもってきています。

けれども、この見方は果たして正しいのだろうか。それを検証するには、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教という一神教の特質を、改めて見直しておく必要がある。地球上に住む人びとの約半分は、一神教のもとに生活している。一神教が人びとの思考や行動にどのような影響を与えているかを理解することは、とても重要です。

まず最初に確認すべきことは、キリスト教もイスラム教も、同じ神を崇める一神教だという点です。

一神教が、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の順番に現れたことは、日本人でもよく知っている。しかし、この三つが互いに仲が悪いので、誤解して、たとえばユダヤ教はヤーウェ、キリスト教はイエス・キリストと父なる神、イスラム教はアラーと、別々の違った神を信じているのであろうなどと思っている人びとが少なくない。だが実際には、この三つは同一の神なのです。ユダヤ教徒も、キリスト教徒やイスラム教徒も、自分たちが互いに同じ神を信じていることは、百も承知です。この

29 九州版 民 2002年(平成14年)2月22日 金曜日
西日本新聞

おまけ

小泉改革は離党解散で

西日本政懇 橋爪教授(東工大大学院)が講演

西日本政経懇話会二月例会が二十一日、小倉北区大手町の九州厚生年金会館であり、東京工業大学大学院の橋爪大三郎教授が「小泉政権二〇〇二年の課題」と題し講演＝写真。橋爪氏は、小泉純一郎首相が構造改革を成功させるシナリオとして「自民党を離党し衆院を解散、小泉新党で総選挙を戦う方法がある」との見方を示した。講演要旨は次の通り。

一、昨年九月の米中枢同時テロをきっかけに世界情勢は、テロ支援国家と、米国を中心とする主権国家連合との対立構図に変わった。テロ対策特別措置法は、テロ支援国家に対する米軍の自衛戦争を日本が支援する内容で、（日本政府が違憲としている）集団的自衛権に踏み込んだものだ。来日したブッシュ米大統領が国会演説で小泉首相を大リーグのイチロー選手になぞらえたのも、日米安保条約の枠組みを超えた柔軟対応への念押しだったのではないか。

一、小泉氏が掲げる構造改革は、国家より個人の権利を重視するリベラリズムと経済的自由に比重を置く保守主義の両面をもつ「リバタリアン政策」だ。換言すれば、民間でできるものは民間に任せ、税金はできるだけ安くする政策だ。小泉政権の支持率は田中真紀子前外相更迭で急落したが、過去の高率が異常だった。首相が改革を成功させるには自民党守旧派との対決姿勢を鮮明にし、タイミングよく離党し解散権を行使。総選挙は「小泉公認」による新党で戦い勝利、第二次政権を誕生させることだ。何もしなければ、じり貧で使い捨てとなるだろう。

一、日本は二十一世紀をどう生きていけばいいか。「小型で活力ある文化国家」という世界戦略を立てるべきだろう。中央省庁の権限を縮小し、国会の機能を強化するなど政治の意思決定力を強化することが一つ。賃金を抑えて生産性を高める方向で企業社会を改革することも必要だ。高校、大学の入試を廃止し、その代わりに学力検定試験や奨学ローンを導入し、学ぶ意欲を向上させる教育改革も重要になる。

ことは、私の『世界がわかる宗教社会学入門』で強調しておきましたが、ここでも繰り返し念を押しておきます。

それでは、彼らは何をめぐって対立しているのか。それは、神と人間の関係に関する見解の違い。唯一の神がどのようにして人間に働きかけ、どのように人間と関係を構築しているのかについての理解の違いです。

ユダヤ教であれば、アブラハムや、モーゼ以来のさまざまな預言者に神がメッセージを送って、ユダヤ民族を共同体として組織し、神との契約を通じて彼らに名誉ある地位を与えようとしている、と考える。

キリスト教では、ユダヤ民族という枠が取り払われ、神の言葉は全人類に対するメッセージとなります。最後の預言者にあたるイエスは、神の子として、新しい神の言葉を伝えた。ユダヤ教の律法は廃止され、新しい契約（福音）が結ばれた、すなわちユダヤ教はキリスト教に発展的に解消した、と主張するのです。

イスラム教の場合、イエスを含めてさまざまな預言者が現われ、最後にムハンマドという最大の預言者が現れたと考える。そしてムハンマドが、アラビア語で、もっとも完全な神の啓示を受け取ったと主張する。この啓示（コーラン）を基礎にして、ムスリムの共同体をつくり、人類規模に拡大し、平和をもたらそうと主張するわけです。

このように、同じ一神教なので発想は似ているわけですが、神との契約の内容が違うので、現実の行動が違ってくるし、争いにもなる。

それぞれの教団はさらに、解釈の違いによって、さまざまな分派を生んだ。

例えばキリスト教会は、東方教会と西方教会に分かれている。両方とも三位一体説を認めているけれども、その先の解釈の違いのために分裂してしまった。それ以外にも、いろいろの分派が生まれている。アリウス派（四世紀）、アルメニア教会、コプト教会（どちらも五世紀）など。分派の人びとは異端として、主流（正統）から排斥される。教団として結束するために、キリスト教は繰り返し会議を開いて、解釈を統一する必要があるのです。

西方教会（ローマ教会）は解釈の違いから内部分裂を起こし、カトリックとプロテスタントに分かれて宗教戦争をひき起こしました。プロテスタントにも無数の宗派があって、例えばピューリタンはクエーカー教徒を迫害した。クエーカー教徒はニューヨーク州から追い出され、ペンシルヴァニア州（一六八二年）に移って行きました。

もっとも、解釈が違うからといって、いちいち争いや殺し合いになるわけではない。時間が経てば、収まる場合もある。キリスト教とイスラム教も、十分に共存できるだろうと私は思います。

一神教は合理性にこだわる

ではなぜ、ちょっと解釈が違っただけで、深刻な争いに結びつくことになってしまうのか。つぎに、そうした争いをひき起こす一神教の動機を考えてみましょう。

人間を超越した、絶対で完全で全知全能の神が、ただ一人、この世を支配している。このように信じる人びとは、この世界をどこまでも合理的に理解していこうとする強い意志をもつことになります。

もしも多神教であれば、Aという神がある意図を持っていても、Bという別の神が別の意図を持っているので、相対化されてしまって、Aという神の意図通りに世界が実現するとは限らない。複数の神々がこの世界に併存していると、世界は統一した設計図にもとづくものとはならないし、統一した意図のもとに実現していくものともならない。その反対に、混乱が起こってしまう。つまり、世界は混乱しており、それでいいのだというのが、多神教のものの見方なのである。

一神教と多神教の中間のものとして、世界は二人の神の争いだとするものもある。ゾロアスター教やマニ教がそうだが、この中間的な形態は、世界を合理的に解釈しようとするところは、一神教とそっくり。ただ、世界が複雑で混乱して見えるので、正しくて善の側にたつ神のほかに、それに反対する邪悪な神も考えたほうがいいだろうということで、二元論的になってしまったものなのです。

こう考えてみると、一神教は、かなり極端な考え方だ。世界がどんなに複雑に見えようと、根底には唯一絶対の原理があると想定する。無理にでもその想定に立って、ものごとを最後まで徹底して考え、自分の思考や行動もそれに合わせてしまう。

なぜあえて、そういう不自然な選択をするのでしょう。それは、自分たちの共同体、自分たちの社会、自分たちの集団の統一や結束や存続をはかりたいという、強烈な動機による。それが一神教の信仰というものなのだ。

この動機自体は、多民族状態から生まれたものだと考えられます。ユダヤ人は、古代オリエントの少数民族で、まわりの民族からさんざん圧迫されて、存亡の瀬戸際に立っていた。そんなときに民族集団としての自らの同一性を維持するために、一神教というアイデアを思いついた。バビロン捕囚の機会に、このアイデアはますます強化されます。キリスト教にしても、最初は決して有力でも多数でもなかった。イスラム教は、かなり初期から有力でしたが、それでもムハンマド自身は少数者のグループとして出発し、いろいろな迫害に遭いながら教えを広めていった。

その意味でこの三つの宗教は、みな同じような性格を持っています。自分たちの団結した社会の団結をこの地上に実現しようと、同志が集まる。一神教を価値の根本にし、自分の行為の規準として、社会を形成する。この動機は、キリスト教にもイスラム教にも共通するもので、非常に強固である。いっぽうこ

の考え方にのらないのが、日本の社会や、インドや中国である。キリスト教とイスラム教との間よりも、そうした一神教とそれ以外の世界の間のほうに、むしろ発想の違いが大きいと考えられる。

この一神教の問題点はと言えば、世界は合理的であるはずなのに、実際には不合理で複雑だというギャップを、どうやって回収するかということ。このギャップに耐えていかなければ、信仰が揺らいでしまう。

そこで彼らは、このように考える。この複雑な世界は、仮の姿である。あくまでも現象に過ぎず、最後には元のあるべき状態に復帰する。最後に支配者である神が出てきて、このかりそめの世界を解体し、あるべき世界をつくり直す。そのとき人間にも、生まれ変わりのチャンスが与えられる。これが最後の審判で、終末（この世の終わり）には人間が裁判にかけられる。

このように、一神教と終末は不可分のものだが、これは、複雑性と合理性との間の亀裂を回収するためのものだ。あくまで合理的な信念を保とうとすると、大きなストレスがかかる。そのストレスを克服するには、ひとつは仏教のように、悟るという方法がある。見かけの複雑性の背後にかくれている法則性に、気がつけばよい。もうひとつ、一神教の場合は、世界そのものが終末を迎えるという信念を共有している。この信念は、合理性にこだわる一神教が、どうしても要請するものなのだ。

キリスト教の成功の秘密

では、同じ神を信仰しているはずのキリスト教とイスラム教が、どうしていま亀裂を深めていると見えるのでしょうか。

現代世界は、キリスト教とイスラム教の対立といった、宗教間の対立や摩擦が鮮明に現れた時代であるように見えます。しかし、これは、宗教の地位や重要性が高まったことを意味するのではなく、逆に、宗教の地位が低くなったことの表れだ。逆説的だが、宗教に対するこだわりや宗教間の対立は、宗教が周辺的な地位に追いやられようとしているからこそ、生まれてくるものなのです。

過去数世紀の歴史をさかのぼってみれば、いかに西欧キリスト文明の側が、主導権を握って世界を動かしてきたかがわかる。西欧文明には、いくつかの特徴がある。第一に、キリスト教をベースにしたキリスト教徒の文明であるということ。にもかかわらず第二に、世俗化した文明だということ。

世俗化した理由は、キリスト教会の分裂と対立にあります。宗教改革によってカトリックとプロテスタントが対立し、宗教戦争が巻き起こった。プロテスタントの人びとは神権政治(theocracy)——信仰と生活を一致させた宗教共同体——の実現を目指したが、うまくいかなかった。キリスト教社会は、カトリックとプロテスタント、そしてプロテスタントのさまざまな宗派やセクトの人びとが、同じ政治的団体（州や国家）のもとで共存することになった。その結果、州や国家は世俗化して、

宗教的な対立に巻き込まれることなく、おのおのの教会から等距離を保って、公共性を代表するようになった。

けれどもこの世俗国家も、キリスト教徒の国家なので、どこか神聖性を帯びることになる。たとえば、王国には戴冠式というものがあるが、国王に王冠を授けるのは、教会の指導者など宗教的権威の役目。そして国王は、神に任命されたから国王なのだ、というフィクションを権力の基盤にする。

共和国になるとさらに世俗化が進み、宗教性は薄れます。しかしそこでも、たとえば人権のように、神が与えた権利が国家の前提になっている。人権を守り、自然法を守るために世俗の国家が存在しているという論理です。この人権も自然法も、世俗の概念ですが、もとをただせばキリスト教神学の考え方に由来する。アメリカ大統領は就任式の宣誓で、聖書に手を置きゴッドの名を連発します。ここでは特定の解釈、特定の教会に拠らない、キリスト教一般の神の存在が国家の前提になっている。共和国は世俗国家ですが、それでも宗教性が抜けきらないのです。

この世俗国家が、キリスト教徒だけを統治していれば問題はなかった。でも、西欧以外の地域に勢力を拡大し、植民地を作って、キリスト教徒以外の人びとを統治したのが、問題のこじれる原因になった。そして、植民地が独立した後も、西欧文明の先進諸国が世界のヘゲモニーを握ったままである。イギリスが支配し、ヨーロッパ列強が支配し、今はアメリカが覇権を握っている。

では、なぜ西欧文明はそれだけの強力なパワーとヘゲモニーを握ったのか。いくつかの要因があります。ひとつは言うまでもなく、産業革命による強力な生産力、組織力、世俗社会の合理化。世界を合理化するためには、強力な一神教的信念が不可欠でした。そしてそれを、世俗社会において実現しようという強力な動機を、禁欲的なプロテスタントの人びとが持つようになった。この事実に注意したのは、マックス・ウェーバーです。ウェーバーの言うとおり、そこには合理性を追求する強力な信念が見てとれる。それが株式会社のシステムや会計制度など、いろいろなかたちを取って組み合わさり、産業革命をひき起こした。

それを支えるもうひとつの要因が、科学技術。科学は、実験や観察によって確認できる仮説・学説の体系で、経験的で合理的な知識です。科学では誰でも、実験や観察と、合理的な推論を通じて真理に到達できる。その真理は、勝手に自分の頭で考えた思弁ではなしに、世界についての客観的な認識である。科学の活動そのものは世俗的ですが、その根底にあるのは宗教的な動機だと言ってもよい。キリスト教徒の社会は世俗化して、宗教から独立していたので、自然科学のブレークスルーに成功し、自己目的的な知的な運動としての科学を立ち上げることができた。

原理主義者と呼ばない理由

非キリスト教圏の人びとの目には、産業革命と自然科学によって駆動された西欧文明が地球大に拡大すること（グローバリゼーション）は、アンビヴァレントに映る。

まず、いっぽうで、その普遍性は明らかである。鉄道や飛行機、テレビにコンピュータなど、たしかに便利で実用的である。ムスリムだろうと中国共産党だろうと、この技術を使わないわけにはいかない。世俗的で、目的にかなっている。その基礎技術である自然科学も、宗教やイデオロギーと無縁であるから、認めざるを得ない。自然科学が人類共通の知識であるので、世界中の学校で同じことが教えられている。西欧文明の普遍性は、誰しも承認せざるをえないわけです。

ところが同時に、この西欧文明は、やはりどこかに、キリスト教的な色合いを隠しもっている。西欧文明が普遍的であるからと言って、キリスト教の発想を押しつけられてしまうと、それ以外の宗教的背景を持っている人びとは、拒否反応を示さざるをえない。特にイスラム教圏の人びとにとって、おそらく、混乱はもっとも大きいであろう。なぜなら、イスラム教は一神教であって、しかも世俗の領域が、宗教的領域と分離していないからである。

イスラムの世俗社会は、イスラム法によってコントロールされており、そこでは、ビジネスのような世俗的活動も、宗教的動機と切り離されて、自己運動してはならないとされている。例えば、利子の禁止。たとえば、喜捨。ビジネスが利益をあげた場合は、地域社会に還元したり、自分が真面目なムスリムであると証明したりするなど、さまざまな宗教的な行動をとらねばならない。

すると、イスラム世界は、西欧文明から強力な産業が現れて、それと手を結ばねばならなくなっても、相手に同化することができない。例えば、世界中の大学と同じように、イスラム世界にも科学技術を教える大学を作らねばなりませんが、それは、イスラム文明が蓄積してきた知識や伝統と無関係なものになってしまうのです。

中国の場合だと、こういう問題に、プラグマティックに対応しようとする。経済をイデオロギーと切り離し、資本や技術を導入した。日本も、宗教による制約がなかったので、外国の科学技術や産業文明を取り入れるのに、大きな混乱は生じなかった。

これに対して、イスラム教の場合は、一神教の合理的な原則に忠実であるために、別の合理性が入ってくると、合理性同士の衝突というかたちでアイデンティティ・クライシスが起こってしまいます。

イスラム的な原則からすると、人類は本来一つにまとまるべきで、世俗の民族国家が分立すること自体が望ましいものではない。国家はむしろ、分断と戦争の原因だと考えられている。ところがヨーロッパの考え方では、世俗の国家が存在することは当然で、それら相互のパワーバランスこそが平和を生み出す、という順序になる。例えば、アメリカの中東戦略の基本は、まずムスリムがいろいろな国を作って、それらの間でパワーバランスを構築すればいい、というものである。

しかしイスラム世界に、この発想はあまり馴染まない。

もっともイスラム諸国の一部は、この発想にのっとって行動しようとしたこともある。エジプト、サウジアラビアなど。でも、イランでイスラム革命が起こってからは、そういう発想でいいのかという疑念が広まるようになった。

すると、世界を解釈するフレーム（ものの見方）をめぐって、混乱が起きる。アメリカのフレーム、西欧文明のフレームは理解できるが、しかし、認めたくない。そういう無意識の動きが生じ、それを意識して突き詰める人びとも出てくる。イスラム主義過激派とよばれる人びとである。彼らの本質は、反動形成である。日本にも天皇主義過激派や右翼過激派、左翼過激派が出てきたが、それらもやはり、根本のところは西欧文明の優位に対する反動形成である。大部分の人びとがやむをえず西欧文明の合理性を認めてそれに従ういっぽう、不満分子ももちろん存在する。そうした不満を土壌に、非現実的で極端な抗議の声をあげ、場合によっては実力行使に出るのが、過激派だ。こうした過激派は、西欧文明が非西欧文明に浸透し、圧迫を加えていることの反動なのである。

過激派は最近、原理主義（ファンダメンタリズム）とよばれることが多い。

原理主義はもともと、キリスト教の用語です。アメリカのキリスト教徒は大部分がプロテスタント。彼らは聖書をよく読む。聖書を自己流に読んで、これが正しいと主張する人びとが出てきた。

プロテスタントも本当は、聖書を勝手に読むわけではなくて、統一的な解釈に従って読む。例えば、三位一体説を前提に読ま

なければ、聖書を読んだことにならない。ところが三位一体説は「説」というくらいだから、実は聖書の本文にそうとは書いてない。あくまでも本文の解釈なのである。聖書はそう読んでもいいし、そう読まなくてもいい。そこである時、公会議を開いて、三位一体説がキリスト教の正しい学説であって、これを信じる者をキリスト教徒と呼ぼうと決めた。それ以来キリスト教徒は、三位一体説という眼鏡をかけて聖書を読まなければならなくなった。文学として聖書を読むのではなく、信仰の立場で読む場合には、今までの歴史と伝統のなかで解釈に用いられてきた眼鏡をたくさんかけて読む以外にない。これが信仰を持つということなのです。

ところがアメリカのクリスチャンは、ヨーロッパからアメリカに移住してフロンティアに散らばっていく間に、この眼鏡をだいぶなくしてしまった。そこで聖書を、自分流に読んでいったところ、今までと違う解釈がたくさん出てきてしまったが、そうした解釈の根拠はすべて聖書にあるのだからこれが正しい信仰だと考えた。こういう現象がファンダメンタリズムだと思います。

これに類する現象は、イスラム教には存在しません。

イスラム教の場合、コーランは、単に信仰を律する規準と言うよりも、現実生活を律する法律である。法律として機能しているからこそ、コーランが信仰の根拠になっている。コーランの内容は、社会生活と一体化しているから、民衆は勝手にコーランを解釈してはならず、解釈を専門家であるイスラム法学者に委ねる。民衆は、法学者の解釈を尊重してコーランを読み、理解する。自分流に解釈の眼鏡を掛け替えてよいと、イスラム教徒は思わないのです。

聖典（コーラン）に書いてあることをその通りに信じるという意味では、イスラム教徒全員が原理主義者、と言えば言える。でも、アメリカの一部のプロテスタントのように、自分流に聖書を読んでもよいのが原理主義という意味なら、イスラム教は原理主義だとは言えない。そこで、ふつう「イスラム原理主義」とよばれる人びとを、ここでは「イスラム主義過激派」とよぶことにしたい。

西洋主義をめぐる三つの立場

過激派は、イスラム教だけではなく、キリスト教にも、ほかの宗教にも、いつの時代にも出てくるものである。

どんな社会にも、少数の過激派がいる。そのいっぽう、大多数の人びとは、時代がこのように分裂と混乱を深めていても、自分の生活をよりよくしたいと考え、家族のため、社会のために生きていこう、一歩ずつ前進しようと考える。みながそれぞれの立場で幸福を追求し、欲望を実現することをよしとする。

過激派は、世界が不均質、不平等であることを誤りだと考える。けれども、世界は不均質であるほうが、ビジネスチャンスは多い。安価な資源がある国、安い労働力が集中している国、

安い資源や労働力はないが資本や技術がある国などが、一つの市場に統合されれば、商品が移動し、資本や技術や情報が移転し、産業が国際的に転換して次々に新しいフロンティアが生まれ、貿易が拡大して人びとの生活水準が向上することになる。

はじめにイギリスなどごく限られた地域が産業革命を果たしたあと、産業化の波がヨーロッパから、アメリカ、ロシア、やがて日本などへ波及して行った。どの地域も、産業化によって、もともとの発展のエネルギーの源泉（世界市場のなかでの不均質）を使い果たすと、頭打ちになり、つぎの地域にバトンタッチする。たとえば労働賃金が上昇してしまうと、もっと賃金が安い地域の産業化だスタートする。不均質自身はビジネスにとって問題ではなく、むしろビジネスチャンスなのだ。

このように、グローバリゼーションは、世界の不均質をバネにして進行していく、必然的な運動なのですが、それに対して知識人や思想家はしばしば、ビジネスや政治のこのような論理と無関係に、グローバリゼーションに対して疑問を投げかける。

この点について興味深いのは、最近の大澤真幸氏の三幅対の議論でしょう（『文明の内なる衝突』ＮＨＫブックス、二〇〇二年）。これは、西欧近代文明に対する知識人の三つの態度が、堂々巡りに陥っているという現状を分析しています。この点を入り口に、九・一一テロをめぐって、私は大澤真幸氏と対談しました（「戦争の効力とテロ抑制の道順」『論座』二〇〇二年九月号）。

まず、第一は、西洋文明の普遍性に内属し、その価値観に従ってものごとを見る立場。西欧のふつうの知識階級はもちろん、第三世界の知識人もだいたい欧米に留学して教育を受けるので、自然にこうした態度を身につける。西欧文明は普遍であり、非西欧文明が特殊であるのだから、西欧文明が主導権を発揮して世界が発展していくのは当然だと見る。この見方からは、アルカイダ・グループのようなテロリストは、西欧文明、西欧的価値観に対する逆恨みであり、許し難い挑戦だということになります。

第二は、西洋文明の普遍性は果たして証明されたものなのかと、問いを立てる立場。たしかに西欧文明は、他の文明に対して優位に立ち、覇権を握っているが、それは力が強いだけ。強いことと、普遍的であることとは異なる。したがって、西欧文明は普遍的かどうかは未解決の問題、と考えるのです。文明の普遍性というものがあるならば、それは、複数の価値観や複数の発想が、政治権力や経済的利害といった文脈と無関係に比較検討されて、はじめて証明できることだと考える。すると、西欧文明の優位を照明するためにも、非西欧文明の最も良質な知的成果が保存されている必要があり、文明間の対話も必要となる。文明間対話を重ねないで西欧文明の普遍性を主張することはできない。ハーバーマスなどは、この第二の立場だと、大澤氏はいう。対話の前提は、複数の文明が存在することだから、この第二の立場は、多文化主義、価値相対主義になる。対話の手続きを重視する理性合理主義が、特徴だ。

第三の立場は、ポストモダンである。これは第二の立場から出てくる。非西欧文明が抱いているルサンチマンや反感は、西欧文明のなかでは、少数派として議論されるに過ぎない。たとえば、アメリカにもムスリムがいて、発言は自由だが、アメリカ人であるムスリムの発言なので、アメリカの世論のなかに吸収されてしまう。ヨーロッパにもさまざまな第三世界の出身者が住んでいるが、状況は似ている。第三世界のスラムに住んでいる膨大な数の人びとは、発言する機会を持たないままであり、誰も彼らを代弁しない。言論は届かない。それなら、実力をもっている西欧世界に対して、実力で対抗するしかない。こうして、この立場は、過激主義に行き着く。どのような既存のシステムも、誤っており、権力的・抑圧的である。言論は、既存のシステムの外、既存の価値の外にあるのが正しい。このようにテロリズムを正当化し、テロリストに共鳴する知識人も存在する。

以上の三つは、ゴリゴリの西欧万歳主義者／物わかりのいい西欧主義者／物わかりの悪い反西欧主義者が、洗練された言い方で自分を語ったものだとも考えられる。

日本はなぜパレスチナ問題を認識できないか

さて、このような知的混乱の根本は、世界の現実と知識とを分離したところにあるのではないでしょうか。

現実と知識を分離すると、世界のなかには複数の立場（知識）があり、それぞれの立場の人びとに同等の発言権があると考えなければならなくなる。その結果、議論は常に継続中となってしまう。

現実は、一つしかない。いっぽう、知識はイマジネーションなので、複数あって当然である。政治であれ、ビジネスであれ、ある一つの状態（現実）を作り出す。ある政策を実施するかしないか、ある商品を売るか売らないか、政治でも経済でも現実は一通りしかない。ほかのいくつかの可能性を排除して、その一つだけを選択するのが、政治である。

このように現実がひと通りであること自体は、必ずしも知的な討論の結果ではない。西欧文明が優位なのは、ある偶然とある必然の組み合わせによって生まれた一つの現実であり、それが世界の秩序である。現実が秩序をそなえていることには、合理性がある。例えば国際社会では、どこかの国が覇権を持っていなければ、混乱が起こりやすい。混乱のコストは高い。

イラクがクウェートに侵攻して、アメリカが何もしなかったとする。イラクは、サウジアラビアにも侵攻できるだろう。それでも何もしなかったら、イラクは次々に、湾岸諸国に侵攻できる。石油の供給がストップし、大きな混乱が生じるだけでなく、イスラエルはきっと核兵器を使って、侵攻を止めようと考えるだろう。国際秩序は、セーターがほどけてただの糸くずになってしまうように、ばらばらになって収拾がつかなくなります。

こうなってしまうのを防ぐには、どんな秩序であっても、誰かが責任をもって、ある一つの価値観でそれを組み立てねばならない。昔は、イスラム世界や中国が秩序を生み出していたかもしれないが、今は、産業文明と科学技術を背景にした西欧文明がそれをやっている。西欧文明のローカルな文化や伝統や価値観がにじみ出したカラーで、世界が染まっている。でもそれで秩序が生まれているのだから、ローカルなカラーが気に喰わないと言っても始まらないだろう。

そのローカルなカラーにどっぷり浸かったアメリカが、人権を守れなどと言いながら世界の警察官をつとめている。もしも彼らが人権を信じなくなったら、動機がなくなり、世界の秩序を維持するコストを払わなくなるだろう。私たちから見るとちょっと奇妙な正義感に駆られて、アメリカが世界にプレゼンスを維持していることで、実はわれわれは、大きな利益を得ているんです。少なくともその認識だけは、持つべきではないだろうか。

アメリカのその努力に対して、十分な理解と支持を与えないと、倫理的に問題であるように思う。例えば、アメリカの若者は兵士となって、（湾岸戦争ではほとんど死ななかったけれども）アメリカの国益とあまり関係のない任務について、場合によっては血を流す覚悟で行動している。もちろん、アメリカの利益を追求している側面もあるのですが、アメリカの兵士が五十万人も集まって行動できるのは、国益とは無関係のレベルの義務感の存在が大きい。このコストを支えるモラルが、アメリカの人びとにはある。

湾岸戦争の際、日本では、知識人が論争し、政府は全く行動できず、遅まきながら金だけは出すという結末になった。モラルの面で、世界秩序に対する責任という面で、アメリカには全く太刀打ちできなかった。それがわれわれのコンプレックスになっている。では今回、アフガンの対テロ戦争では太刀打ちで

きたかというと、そうは言えない。前回金を出すだけで笑われたから、今度は貢献しているふりをしようというレヴェルでしかなかった。

アメリカは、世界中の地域についての専門家がいる。アメリカ独自の価値観に基づき、社会科学の方法を駆使するプロフェッショナルの集団が、世界秩序を維持する方法の研究をしている。日本みたいなぶざまなことにはならない。彼らが研究に専念できるのは、国際社会の秩序を維持する研究が重要だという認識に立って、財団や政府、国民が大学などの研究機関に期待して、資金を出したり支援したりし、専門家の意見を尊重するからである。

日本にそういう研究がほとんどないのは、政府がそれを必要とせず、国民も興味を示さず、誰も支援しないからである。当然、プロフェッショナルも育たない。この違いを埋めることが、いま大事な課題ではないでしょうか。

アメリカを批判するのは自由だが、アメリカがいなくなったほうがよいと言うのなら、かわりにどういう秩序を誰が生み出すのかという、オルタナティヴ（代案）を出さなければなりません。形式論理で、アメリカ文明が普遍的かどうかを議論していたら、大澤さんのいわゆる三幅対の堂々めぐりになるに決まっている。それを抜け出すには、自己責任の概念が必要です。自分の生存を自分がどうやって保証するか、それを倫理観の根本に持つことです。

どんなにすぐれた思想や価値体系も、最初は、自分の存在を正当化することから出発する。それができなければ、その主張自体が成り立たない。そのうえで、ほかの人の価値観と対立したときに、さまざまな対話が始まる。

わが国の議論は、往々にして、価値相対主義的な堂々めぐりの知的遊戯になりがちだ。この点は、大澤氏が指摘する通りです。問題の根本は、そういった知的世界と、ビジネスや政治の意思決定とが全く無関係だという点にある。決して、知的世界の堂々めぐりが現実の停滞をうみだしているわけではない。知識と現実の隔絶こそが、パレスチナ問題に対してわが国がまったく発言できず、よくよく認識することすらできなくなっている理由です。

共存の可能性

価値相対主義は、論理から言えば正しい（否定できない）。ただ、われわれは、いかに考えるべきかでなく、いかに行動すべきかということを、議論の出発点にすべきではないだろうか。

九九・九パーセントの日本人は、市場経済にそくして行動し、政治的な自由を民主主義というかたちで享受し、生きている。この現実から出発しない議論や、この現実を受けとめない言論は、無意味である。現実に足を置いてこそ、私たちがなぜ、価値相対主義という可能性がありながら、西欧文明の価値観をベースにした市場経済や政治制度によって、日本という国家（団体）を維持しているのかということを、ひるがえって説明することもできるだろう。

西欧文明の枠組みは、やはり二十世紀の、そして二十一世紀の、人類のスタンダードなあり方だと言ってよいでしょう。それは、西欧文明の普遍性を示すものかどうかはともかく措きます。少なくとも、西欧文明が人類社会に、市場経済と政治的自由というかたちで共存の枠組みを提供し、その枠組みに、多くの非西欧圏の人びとも同意し共鳴したからこそ、この現状があるのではないでしょうか。

しかし、ここには二つの課題がある。以下の二つの課題を、われわれは実行しなければならないだろう。

ひとつは、こういう枠組みのなかで、より豊かな共存の可能性を追求しながら、これを与えられたものでなく自らのものとするために、この制度の西欧ローカルな起源について詳しく見ていくことである。たとえば、ある制度のどこが、またなぜ、キリスト教のにおいをぷんぷんさせているのかについて、充分な知識を持つこと。

もうひとつは、ひるがえって、現時点での人類の共通フォーマットに従いながら、日本という民族集団のもっている、全く別系統の歴史の蓄積や文化や伝統を、市場経済や政治的国家と整合するかたちで再発見し、再組織し、再定位すること。これまでこの課題は、なおざりにされてきた。歴史をふり返るとき、あたかも市場経済や西欧思想が標準であって、伝統が遅れたものであるかのように扱い、そこに何の関心を持っていなかった。自分たちの過去に背を向け、西欧文明に関しては受け入れ、非西欧圏に対しては反感をあらわにした。それでは、自分は一体どこにいるのだろうか。そうした反論のゲームをするにしても、自分の手札を相手に明らかにしないで、ゲームを続けることはそもそも不可能なのです。

裏書きのない言論を乱発するスタイルは、外来文明を受容した文明周辺の知識人のあいだで、昔からしばしば見られる現象でした。これは、ポストモダンでもなんでもない。素朴な近代的価値の盲信と、手続きに信頼を置く相対主義、さらにそこからはみ出てしまうポストモダンの三幅対、という大澤氏の図式はとても面白いが、それは、言語ゲームをめぐる議論の中で、本質的にはすでに語り尽くされていたことだと思う。

言語ゲームをめぐる議論を通じて、私の得た結論。それは、ひとは、ある言語ゲームのなかで、現にルールに従い、それに立脚し、その価値を体現しつつ、同時にそれを相対化していくことができるということだ。たとえば、民主主義の政治的手続きに従い、民主主義を擁護し、自分の生活を統治しつつ、同時に、民主主義という制度の限界を自覚し、それを批判する言論をのべること。これは誰にとっても、できうる最大限のことである。そして、こうしたことさえできれば、共存の道はより大きく開かれていくだろう。